

駒鳥

東條歌一

いつかは和品三鳥揃へて飼ってみたいと思つてゐる。和品三鳥とは、うぐひす、駒鳥、大瑠璃の三鳥を云ふのだからである。

うぐひすと駒鳥は、現在手許に置いてあるが、大瑠璃については、全然、経験がない。どのやうな姿態の鳥なのか、またその鳴聲のほども未だ聞いたことがない。瑠璃には、大瑠璃小瑠と二種類あるのだからだが、通の話に依ると、小瑠璃の方が鳴きも姿もよろしいとのことである。

この三鳥を手許に揃えて置いたなら、私の嗜好も甚だ満足するのであるが、いづれも摺餌鳥なので、私のやうに病臥の日の多い身には、些か荷が大きすぎて手を出しかねる。

うぐひすは二年あまり飼つてゐるが、素人飼には、まづ無難でおもしろい。うぐひすと云つてもこの中で捕獲したものであるから、勿論、藪ものである。それでも春にさきがけて鳴き出し、三段に鳴き分けるから妙である。一度は桐かなんかに唐彫をほどこした留子に、少しは高値なうぐひすを入れ、三光か文字口の鳴きを聞いてみたいものである。

然し、そのやうな高値なうぐひすの鳴きは、私のやうな素人には、聞き分けやうもないであらうから、やはり、藪ものの歌を楽しんでゐる方が、自然であり、相當してゐるやうだ。

駒鳥は昨年の秋、日向の友人に依頼してみつけてもらった。深山溪谷に棲んでゐる鳥で、一山に一双より棲んでゐないのだと云ふ。頸部と尻尾が茶褐色、羽はくろずんだ緑色で、下腹部は鼠色にぼけてゐる。足は精悍そのものを思はせて高く、眼は水晶のやうに張があつてすずしい。總體に均勢のとれた美しさ、何處か気品のある姿は、到底うぐひすなどの比ではない。

これが頸を伸ばし、尻尾を上下にピンピンと振るさまは、朔風に嘶く若駒を彷彿させる。鳴きといひ、貴公了然たる態度といひ、蓋し、鳴禽類の王であらう。

しかし、何處か乙に取澄した恰好は、人に依つては、好めないところかも知れぬ。

これは私の飼つてゐる駒鳥ばかりかも知れぬが、彼には妙な性癖がある。性癖と云ふよりも、むしろ、無気味さと云つた方がよいかも知れぬ。それは、時折り、一切の動作を中止して、呆然と立ちつくしてしまふのである。

短くて十分、長い時には小半時間も、ある一點を凝視して不動の姿勢を守り続ける。そのやうな時は、見知らぬ人が籠に近づいて覗きこんでも彼は微動だにしないのである。その姿は、時に傲岸に見え、奇癖に映り、無気味にさえ感じられる。

ある日のこと。

晝食後、私がいつものやうに縁先で駒鳥に水を使はせてみると、其處へ、附添夫をしてゐる友人の一人がやつて來た。

「相愛らずやつてますね。」

友人は笑ひながら私の傍へ寄って來た。すると、それまで水玉を飛ばしながら行水をしてゐた駒鳥が、どうしたのか、ピクリと動かなくなつた。彼は凝つと友人も顔を見据えてゐる。

「オヤツ、おどろいたかな。」

友人はびつくりしたやうに云つて、急いで一間ばかり後にさがると、これも駒鳥の様子を窺ひ出した。鳥は水盤の中に兩足を踏張り、體の半ばを水に浸して微動だもしない。圓らかな眼は眞面に友人の顔に對してういる。女字通り不動の姿勢である。

「なんだか氣持の悪い鳥だね。」と友人。

「ときどきこんな風になるんだよ。」と私。

暫くは三者相對した恰好で眺め合つてゐた。恐らく十分間もさうしてゐたであらうか、私も流石に呆れて、傍らの土瓶を取上げると、いきなり鳥の頭に水を注いだ。しかし、それでも彼は依然として動かない。

「これあいよいよ氣持が悪い。あの眼、あの恰好、まるで腹の中まで見すかされるやうだ。」

友人は如何にも不無味だといった形である。

「ほんとにへんな奴だよ。」

「これはおれが居てはいつまでもかうしてゐるよ。いよいよもつて氣味が悪くなつた、退散、退散……。」

友人は笑ひながら踵を返した。

「平家の軍勢は、水鳥の羽音に驚ひて逃げたさうだが、君のは駒鳥の睥睨に怖れをなしての方だね。敵に背後を見せるとは卑怯なり、だぜ。」

倉皇として去つて行く友人を見ながら私も笑つた。鳥はまだ動かうともしない。

駒鳥は何と云つてもその鳴きを愛づるものである。ヒユウと軽く口を切り、カラカラカラと音をころがすあたり、まことに美音奏樂の極致である。

殊に、頭の毛を逆立て、尻尾を振つて鳴立てる様はひとしほ見事である。

就中、手振駒に至つては、飼主が手を振つて見せれば、それにつれて鳴出すと云ふ。まことに鳴禽の冴え、賞するに餘りありである。手振駒は私もいつかは飼つてみたい鳥のひとつである。